

杉よ！ 眼の男よ！

富岡 誠

「杉よ！

眼の男よ！」と

俺は今、骸骨の前に起つて呼びかける。

彼は黙つてる。

彼は俺を見て、ニヤリ、ニタリと苦笑してゐる。

太い白眼の底一ぱいに、黒い熱涙を滌はして時々、海光のキラメキを放つて俺の顔を射る。

「何んだか長生きの出来さうにない

輪割の顔だなあ」

「それや——君

——君だつて——

さう見えるぜ」

「それで結構

三十までは生き度くないんだから」

「そんなら——僕は

——僕は君より、もう長生きしてるぢやないか、ヒツ、ヒツ、ヒツ」

ニヤリ、ニタリ、ニヤリと、
白眼が睨む。

「しまった！

やられた！」

逃げやうと考へて俯向いたが

「何糞ツ」と、

今一度見上ぐれば

これは又、食ひつき度い程

あはれをしのばせ

微笑まねど

惹き付けて離さぬ

彼の眼の底の力。

慈愛の眼、情熱の眼、

沈毅の眼、果斷の眼、

全てが闘争の利器に盛られた

信念の眼。

眼だ！ 光明だ！

固い信念の結晶だ、

強い放射線の輝きだ。

無論烈しい熱が伴ひ湧く。

俺は眼光を畏れ、敬ひ尊ぶ。

彼に、

イロが出来たと聞く毎に

「またか！

アノ眼に参つたな」

女の魂を攫む眼、

より以上に男を迷はした眼の持主

「杉よ！

眼の男よ！」

彼の眼光は太陽だ。

暖かくいつくしみて花を咲かす春の光

燃え焦がし爛らす夏の輝き、
寂寥と悲哀とを抱き
脱がれて汚れを濯ぐ秋の照り、
萬物を同色に化す冬の明り、
彼の眼は
太陽だつた。
遊星は爲に吸ひつけられた。

日本一の眼！
世界に稀れな眼！
彼れの肉體が最後の一線に臨んだ刹那にも、
彼は瞑らなかつた。
彼の死には「瞑目」がない。
太陽だもの
永却に眠らなす。
逝く者は、あの通りだ——
そして
人間が人間を裁断する、

それは
自然に叛逆することだ。
怖ろしい物凄じことだ。
寂しい悲しい想ひだ。
何が生れるか知らず？

妻憎と哀愁とは隣人ではない。
煩悶が、
その純真な處女性を
いろいろの強権のために蹂躪されて孕み、
それでも月満ちてか何も知らずに、
濁つたこの世に飛び出して來た
父無し雙生兒だ。
孤獨の皿に盛られた
黒光りする血精に招かれて、
若人の血は沸ぎ、沸ぎ、
酸酵すれば何物をも破る。

死を賭しての行爲に出會へば、
俺は、何時でも
無條件に、
頭を下げる。

親友、平公高尾はやられ、
畏友、武郎有島は自ら去る。
今又、

知己、先輩の
「杉」を失ふ——噫！

「俺」は生きてる。

——やる？
——やられる？
——自殺する？
自殺する爲めに生れて來たのか。
やられる爲に生きてゐるのか。
病死する前に——

やられる先手に——

瞬間の自由！
刹那の歎息！
それこそ黒い微笑、
二足の獸の誇り、
生の賜。

「杉よ！
眼の男！
更生の靈よ！」
大地は黒く汝のために香る。

——一九二三・一一・二〇——